神戸大学附属図書館

文部省文庫

神戸昌藏藏書

蜻蛉日記卷中

やまひのつゝかやうにとはかなくなりぬれば、天下のものゝ
ことなんとしたがへハ、半年い後うちあしくて、
しやうぐつ、七月十日にぞなりぬるなりけるよの人
さとりもまくこばかりとやしこゝろまくうちよ
もつかしけるまくこなれやもねんとあるしなる
人をうらみつゝ、はたもとをんかしもちらんえて
半年わくらゝ、ゆくよまいりとてしてふ和ひてあ
ることなき人をこゝろにかけはしさつゝしとおし
かりでうみしきもれはよんとかきてものもち

ゆくゝとそやうゝとハ
ゝすせんとうや
ゑんうとうろこゝろの
るゝ

弼齋手

かくてのこれらは
うつくしなどいとあやしくなりぬるを人は
ものしにはかなくとはれなる
ものくるくるくる

文後記ノ
そらうらぬさきふ
と表ぶうり
うそうり

もみしかとうに八しにへもあせとと見よき
どたとろしくゆきさうもしわら仮わ浄と山といよほよ
ゆきさうていとくうまよとうちやと見ほもも
かくもれりひとうしど半ぐさうぐ秋ごほふく人ゆる
となるこいつまこ仮し代らわ毎半そしてつとて
ゆきうりてゆくやは去し行こ毎わあとるふくよ
ぐいとをむやうなるうちをしをわまう人うよ
たばゆる人しこ我おうまこかしさい半てなどて
人ズクナニテナルベシ先ようり
仮うこてあゆこいをハあをろろる人わやしぎよ
れりひてさうめきさうぐいとわびしきかう
耳言五七
ていきとぎてはきう井にてわうとごるとをろ

とやてまくひきは海らうてさかくとるほどにいと
しをのとうる物くいうにせんせんなんともなる
人ひとり人ちうる色き物ものにもとこやわまわるいえじと
なりよほどよひまにのうと半ぐる物ものまくう海二
三ひきはくあてのきうてくわうとろものふ
ゆまなわをわとしいさちとと海らぐゆきとき
れ人ちのとめて呉ふあれかどんちうひてハ以師本神さく
てばれりうなりにてをひうるきさるしわあ
くしひざ海だきわうとく物くしは海ゆとにこと
ハカとわうまとれわふよしひ孫きくるうちをげ
ものきしうる海乃くちよに半ふとさわ
こ乃海くちかうとうちよわにくとわうとさうぐ
草

ふるまひ乃おわらはれほいるとし物よが仮永も
乃人とつかよわへ人こちのき清みとしてかやまはまへ
こしゆきて乃人とるとしたとはきつと半ぬこわうとしが
ゆるとみどいつみとえるとちハいうハあるでわまこ
してい海ハ半とらてゆあハせきうちを清てうち
いて乃とあよしにめへつてみるり半しハさきた
とし人梅稀よこもやるひきてまあらわもの
しお行へどとも井ハつと半しばらりとさいと
してゆくいとうこちいとるひくもるとも
いえしとも乃ぐみしうれるとさるひた
さる乃ぐうるばうわよてら乃中よつきねゆやよ

齋屋

物みどしき半ちわそしばいまて梅しらちさん
さしらとて乃きるとしきまくに梅しぬろひらしに乃
みなるるよなわてゆみし物してぐうるとろほ
ぬ分乃わるやをを伽乃るよりをにもみうるよひせ
梅と次あいひもやしばどよちふけてやきのさ材
こゆるしし半とし伝しぐうとし半とうてしもとらるよや
えへとわかるきうよきとしもお井らわていとこく
ちかり半る九月月よ者ていとあるあ分伝
こうをよとわて乃ころくよまへうるとそえへわる
と半る乃えかへしるとをよあ紙ぐもハかを
のどえへとわ乃うう形とよれしかあとどかう

みつねんの例の
歌ゆえなうも
をゝくんのん。

家持集
命をるふすりの
ひさのうへて春を
春のあそとあつる

やうにて丹さきに草乃なりにて
よく志ほりしやうにわくしきこゝをとる
もなにはゝとそひさしくハさらのいふなりといふ
みどかしいのことをゝはなかうさんとれりよか
とにさしてもるまにるさにのかるとまわいとう
ゝわうよこゝろよくらるこんにわうきくぬなわき
ちちそゝなんとわとくはれわうなりかりいそて
かこなしかんちくとものかたくてなとあまはえやな
ふふ乃わるふさだかりよ乃田守物たひる
こゝろいふひるくなるけなげようちよどひさわ
うしもとわあ乗てきもとくゞるてとく
ほうんと松をよみなりてはわきんてゞ丹さる
てゞやをこなくんひたまれこゝわ分をけまはゆや
よわるさよのわるるまにえやうきんゞひんし
にほいとうめしうにてきわきちうこ川乃わを
ぬいゝよかきさきやうにえくぶうわるはゞらよへ
なちひまゞをもの乃わるれるくをくるわにえへ
くわうしわくんなゝ二なゝれをよくをもくあに
くわてとゞめわれまてしゝへ丹でしケんくるつね
でよゝわる半とゞかりがもせゞやとたをよよ海
にこ乃ほゞしれたくてこひしうかみしるゞ乃
きわゞを丹くうこゝ松乃こゞも乃なくにへ

さうゝ谷
ちゝみたり
延喜式

和名ナ七水菜類云
藏祖立反養生
秘要云之布木
菜名也

これもわいしたらかけいさうく仏ヤ乃見に
をゝいあもゝをゝらひきとごもやきばかうあうゝ自是ちとゝふと男辛
なるやなぐいなをきゝにさてらまもあゝぐ
ひうれ井なぐやとれたるかゝうらゝ仏けゝ坊
はとうなゝをゝきくゝまゝ仏ちゝをうかゝうる
いけよしぬよしいよ物れひ生ちゝとゝくゝわ
てゝをゝことゝくゝしゝてきゝうゝるけよあゝ食て栄る序ゝ
しゝ所ひゝしゆ物ゝきゝかゝてゝうゝちうゝぐゝゝ辛るや
ひとゝれうゝをゝかゝ行ゝやゝるゝゝて八ゝたゝなゝわゝを
ゝうゝよゝてゝよゝ汚汚中ゝなゝまゝあうゝゝてゝわうゝはゝぐゝ
よゝまゝあゝうゝゝゝるゝよゝゝゝやゝうゝこゝうゝてゝうゝら乃ゝを

右のゝくゝの乃下て
りる布ゝあゝゝらゝ
ひてゆゝをゝゝゝさひ
さにゝりゝくゝゝゝ乃
ゝゝふゝゝのゝくゝゝを

ゝゝとれほゝゝきほゝゝゝてゝゝゝゝゝ水ゝゝゝゝてゝゝ
てゝきゝてゝゝきゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれ
ゝゝ行ゝうゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふぼそもぞよて生てふとそんやれハうれ
よ平さるん不ゑうよ
とそうる得んるさ
ひ海いんよとしたバさなわとそんて
をくなるまくにひりとそんえ生るもいとかな
し空とそんてはハいてほやてうどハうと
乃れりてまつそあるほうちあてうと乃れ
そていとさバしくとさてき生てわ
うきれのこどもうをほそやうにてれりせよ生る
といふうをうしひわるをきうにもたバく
となるとぶそれたるいてさき山吹乃ろまぶ

松葉紙後ハとゝる
ふまいてさき

源氏こてふ
波次ハ波のなさゑを見て
こゝ名よ言る山吹のさき
春物名 ゆれこの太ん
うちふゝる波のゝくを云ふれいてさきちる花と見さゝん

つよところくこゝやわてわしのみうとわうこゝ
まぶ物ふしてふうにもそんねほどよとるうなるわ
ちのかゝしてふほそうくひそるゑわとゆき
ちぶほどにいけくのやとひ生たいう山
一人乃ひくよとぶこなるこ乃色もいて
ゐくれよきこゆるあいひをよしとそいもくか
しこなわたるていゐわもどひていそ
なわわやぶてたのこもかうハ乃とわべて
ゐ乃ほくよようひりてそれとしてゆき
かるほがよ秋の乃ゐをわゆくらどわうちか
ま乃ほくとびちぶよものわしにはうなしさとさら

ようどなーさてあつまりて海をにいらせまして
ひとくらゐ海いでさせるきゐにんたせやさどら
きいよたきねこまかれわ海つてせう升よとて
などいひさしぎきるとなどいたしさしわらた
れい海はなはちるをよこうとなで拾とるる
ちりやけよとを海ひろうあるなわいちうなき入り
いう海ほーをよりいたしさ拾うせてぶし
くんまとろくやてものしらわもんくるまろも
ヲにのせてくなよはこなるさ海よ物しを海よ
なきんくさらんをきよりたを海をとわなるさ
海よときしにも海してあるさまーまるろ日

中ノ中七

拾遺別
ろうそをしとそ見
つるきねのようをきり
くくうちのこして

もきろくくこ海いるさ海よえしらでよさわへ
一海ろノざうきこたらかしらこまりてわせよやてさい
ざもちていでよもんしひまるわまかでいうにこうた
うろんまいなるこ海しうばをろやをよわら海一
をとれさなききうちよれをよなるべしうちくじ
きるる海ようているる拾ろたさんかるなく
いたしをかりくやなんろひうわんがひとろを
きちりそくくらもかこ海八日よなわね二百ろ
よるうろこたうたえさわやしとれをよわ
をし物いしなる拾かこたるくせよなでうち
ひうもいやしあるさまーをのくわやをよなく

ゆるよこれらうしわかんひきよせ給へばよくせ
ずしてはたまりさえきりやぜうをせば衣かひて
をうをを物よりてひのひねずんハしぎよえんし
ゝてうを寄わとえへをすまるのひもつりこいをと
ゝ家うゝ酒乃平とぶねを入れわしうえをーとの
見わをいこいふひもなしいわうの口ハたうをしゝ
きて失ねるよなをいやくさわていこもやつうをし
をまをうわのちうをとこーをじくをえくるこの
大ゝ流ゝ嘗會よ院乃内給くわうさんをおさなきへ
よわゝみわせさせてん十日乃ふとさうをうてして
としもまいの乃ゝしひよいまを保しの大酒会

中ノ中八

ゝちもそれもわをまいの内くしををきこと
わをを二月をうどになんをきうるもたるまわてを
わふをとさをやをれをうんををひとわいてうわ
し孫うもに内ぶれしをわさ海ーき平ぐい海なん
かへをを平をを月ををるなをかるれハ夜者けねるよを
かーるがうの乃ゝちなを海ーうハかうら海ーやと
ゝをふう酒ぶいえーきをんをうわ後をれとな
ゝをうーのをき平をわいハ月ハいを海ゝじゆきゝちをーに
されをきをひきをををーきをのーぶなるを
をんをいをひくれをきをゝちをわをうちをに先まハ

やうて生ちにしまくにたやすけもなのこゝろ十七
八日よなりにあわゝのそひるけるまちわゐい
こゝいるうちにてわれはつまくやさるま
してもしやとれをまをきとをきくをぐわい
にしへとれをへハ永ゆにしをわしらのかしまや
わをきんわゐほもちらわ物とをしさ
をしものをきをひいづまはしもしらゆ
ゐやにもなるをしハ永られをゆき
よこをわをきんわをもをかえしを
をそれをしてれりひゐやれわとなゐせくをる
わ先乃わしやとるしやにあひをををも

物しまへをにてくのをふをにとをひ
ゐるをやてとをゐ歯まわかれもこ生をうや
きわなのんとれをようをなわにらわ九十
月をれをしをさ歯よてをすを先をよにし大上
やを乃ごきをれやしあをさとをれを人も物をるを
きやてしわをちをまをこう乃をちわくれら
しとハれをへをを先くれてれをゆるをにれ
やいをなゐ人ををくし冷へをまをわをうし
をどをいをわをまにもいを物乃をれべをし
をもはをなわて大ま湯ををのををる屋をその
中にハををうをまをわくえゆるんちをわをわ

大富ひとをもをもを
ゝとをふありをてハ
をゝひくをるをう
をかはるし

ゆへよんもあさわれ井をとれをよかしさをも
なるばこりをかく仕まばいとうゐわしさをし
としたるひまよけねほどにものしてうぐう
よゆへ侍わうわぬ食うたまとよれねあねを
うわたまばをうゐ今えてなんまうでねるいい
うにへいよんわをとしたれきねきうへさをしていて
んをとわれいさたうゐ一乃ふちしさうへと
めてとしたわてうもをきおかこともおど海
いうさ先るをかしーとにものして行うばゆく
のへんさうをべてよとていでられわよ行て
びよわてよるをとしばいとあれようれしき

なうねたなしれりてにこれこ行うる人わをわー
をとそれどさにぞわるさわるれをとかしくき
学るはしわき学きあうゐをばかをうよか
きてうちゐはとしこ行えて学る人ひう
井てわれをまに海さうゐ学るわうもいを
しへへのさうゐ学海もさわてし物わをとて
よは学てぞうちこばあるうえうわつをてか
うふよればゆうわうう
れのひせをしゐうひひはつまなを
なうきをわうを悩よきうあッ
とうかへいうれしほどにねる一ッーをもわ

てよくわうしてきりをのぼるらいだいかの
りてよてかうしはうえよきりをのほどのさか
う見いりごとなれいたるさびさてさしごろ
くはるとにうわんたるさちのはえくさし
てやびなるわきさもひとれりようづうひせ
れをひいしのやきだかるにさにをいのたる
をなくくもきるさくそにぬくまひさもねね
いそなきこそとちひくーつまでるを
さてやこわたとやてうにねり物どもちうて
らきのよのまへわるうとはるくれにしがとわる
いしさはるきれどなとをしのちが

古今　小町

人ありんつきのあきてはなかいあてむしのちーて
ちふんやけをり

はしらをちなるあだなんとくばをうしらはる
つてうふつくしこびとかうぶれはひゆやう
はこのわれしとめつとしあきよなんふとかよ
さなりせこびべやとにもいひさちでんはるさ
ようなもわさて三日もをうしの三日まる
きるのやきよ一日よりもをようきちうく
ふをたうしまくくゆはたるを一日の
やうにしこれをしはれるはうこのたの浜
うにひ秋しをるとちかくなれをうな
ふれのきもも中門はしひきこのひぐはげき
てわるよひるもなるをひきとぎれこれまし

てうとうわれとうなんまるの八大郷食と
あのくまいくちうきんしばこしひさうのとしと
んうんとしへきまどとわりよくるはうたくどにひ
ゆかたづるまきりに夜婿程てえなよわくるとちとをよ
こゆるうでうのはまたちまこをはちしし
ちくゆくとをきぬくきくるばどにらうやくく
うきつとくきくうてつまばをくてをのをかほと
ゆあうなまるたとわくしなどもわうばるえゆ
くへつとくせ次まるこ二日どかわわつをてらうたこる
つこはわまどいやくしてをきくこうにてなんよう
さうをのせんよいうなんかをうくしさにを

中千十二

てはれき半うんどにてわうしたわとかてをの
とかうとく物まつをんばいきぬ所
をあるるきうまるやくくとたをよを
なくて四月よりぬもいとちうきとこうをる
えうどにてくる海きて つうちやかし海さ世
どんをどやをくもみくどいよへうへるぶい
とうるくきわうをしうを海して らとをきう
く半きくうもかをなをなどをせまくせ
いひくへうへうくたしい半ちの月城さなすこへ
をよびてかうきくをうんをくしるをう
ちにせよとあるをうたちどうの月天ををを

六帖

きのハせ四日雨のあしいとのぎりにてあらしなりの
ゆふぎりにまていとものうしいとをとを色
きぬしきにおちてなんひごろをよまうなくく
ぞをるかくアしなり五月なとをあやまて虎
くとおもしねくとうやうにたもの
ゑたはゆふまてしよたきせねをのハ消なりぬ
ある雨のあしもれはる間うな
こ海のにをのとやひとをとし
今ハ三月にこもりよりなりはいとたもく
なるをいえをせくてらまハしほのにとれをひ
てあくきあつきのよわるとひさうし

こゝを半いかよちわにしう八なゞきまつゞし
ゝ
ぐやんせれもの半きちて物みどとわゝ半
ゆゝゞきをゝおほどにかゝしハなどやれをかん
ゆるさしあゝハゞくしよいゞとあるこゝしろえき
れてかゝゝろとあゝゝがゝしろるハいとわゝき
わゞなわなとこゝろゝにいかゝつよやゝゞとなき
ゝとゝゝをけハ半を月をえなゝゝよあやゝしの
とハかわをのゝつゝにあゝゝゞやれゝゝゞいそき
ゝわわねをなゝきハおゝゝにようちふゝゝてゝゝる
ゝまいゝわゝまゝゝふをもれなんゞほどせ
ゝゝ人をハゞゝきゝゝろゝていなをえ次ひは

中ノ中十四

わゝとうちわゝきほどゝよて、えきゝゝへゝとや物
ゝてゝゝひ半ゝへねゝゝるゝよをきなゝゝゝゝあゝきま
ゝとゝゝゝようゝゝをなゝ半ゝゝゝるれハいゝと行ゝ
ゝまようゝゝ乃日こゝ行ゝんゞゝるゝゝとゝゝよいゝ
ゝるゝものゝと半ゝへゝていゝへゝもゝゝて行ゝゝゝふゝゝゝ
れゝゞ行ゝゝをゝ海にてゝいゝゞゝゝや行ゝ海をゝゝゝゝ
わゝひて人わ行ゝゝゝゝゝ海でもわをゝいゝゝき
乃ゞゞゝてわゝゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てかゝゝわねゝをゝなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝまいゝ乃ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
わゝもいゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

古今

百ゑのあさぢつるまでを
ものとにおもひたまへ
ものとにおもひたまへ

ちとせをへてせきもるにはなりぬれどあしまにかくれ
ていけるにのりきりくひとれ走をて
きくゆゑよ洞乃うねきくゆゑ二月十五日に
なりぬきくやこゝろよやなんまるやうとうさ
に人しらぬもづれとあるほどよひんよいわ
ぬまなどあるまれはしやうぜんとて
ちひしろせぐのひしゆのきよきやきく
さをんちちとちひをくをるとをるにもか
やうのとはちひけぐわしをのとなぐちく
しいえしゆあ
うちちゆちるとのにをるさひちゆ

十ノ中十五

なけくをとにハちうとおれりよ
ゑんちやぐちなぐさうじやゆてちにうちゆ
せんやちくれひをわぐはいそでなとよのの人に
ちひせんちとくくしをわるよをやなりかまして
こをいとかしこうるれとくハえさをたりよなき
せよやれとをあるとこんをとごをべとかひ
てせぐひ月をちをしよちにはよちのよに
うちをあいなくにををそのをくれをけうなん
やてこいひ城このうご城せてまつあんとくをい
ちやあるとりてなぐちひまるよあ中

在
遂

うろ覆ぎなるおきさをやしどかんとゝばいと
うろせしきゝしなりわ行基菩薩ハゆゝしき
ハ人乃ぎをわよこそ分なるよしゝはゝくゝあひて
ぎんなどいひてかゝ巳ぎにハわそんはあるそと
ころやてゝえんんもえよかゝとりゝよなるこ
こほ仏てうえさ次二月じかるとあるて雨いとく
ゝ利こちゝ尾ゝ者しくゝゝまてひとゝとちうこ
とちうちゝかゝゝゝき巳ぎんたいうでなをさんわ
ゝもゝうみとおゝゝまれ
なひゝかゝみたなゝをわるにくゝ行の
うきよゝとゝをはかゝゝそゝうゝれ

水鏡廃帝紀ニアリ善恵法師トアリ

ゆよとなるあゝねをゝもゝどよゝんハいづちうゆ
よをんよゝ乃わゝるゝゝをんゝりとなゝいゝ毎な
きまでそこもうゝもゝなひまゝどれこなゝとそて
ぎゝまゝにわゝれさいひゝゝとき人いうにおうゝと
ゝひゝるゝ毎んゝもうゝるゝわゝるゝよゝをゝみゝてゝさ
いひきんとれゝゝゝゝおこゝゝ人ゝゝうゝゝき消ゝう
ゝね時ゝゝ人ゝゝ拝ゝいとゝまゝゝうゝほゝなゝゝゝゝゝ
ゝゝきんゝバゝれゝゝゝゝゝ

くらなるときへしきもとしかすこしはなびせむ
やまんばたてよんだなかいうべるきとそる
こしたをあやしよしもしきしをかのもるしわく
やまんばうるあんたてとうきんんあをもはをも
もちゐるをしやをちやるまずやとさぎやあよと
なりあ五月よをなりわ永いをとさきさよとぬれ
まるんんのかなしまわかとしぬさ次ともたやう
ふるをあんはゆしうんんというぎせんをるといひ
ぎりいあるみにうゆしかんん

世中にある我身はるひねをハ
さしよあやもちまさりそわ

とぞいひやらぬほしきれどさうへきんんなを
まばんはよとひうるさるかていそてわまハまハ
のやこゆうよわうてましていとたまくよて
あをるがめよなるたんハ草ともを升らわてあ
ふをいおこなひのひまにほをあらをせるをとる
わさぬしきんんをどやそわまいのきくくう
を升ちくしてわるひあをおからみ升しい升
をるほどよれんまんくやのちまばま
いのどあんとれたをよむ祈ぎくとたし
れよをよをきわまはをんんをとりてをまばり
うくくしして升ぎわ永をぬして二ときこと

歯て物をいとんをくハわるゞ〳〵ハいなるゆゑろ
なるんやてなるもわるとわたゝに半をやゝひていえん
〳〵〳〵やゝ〳〵人よハいひさ歯半をゞ程れていまく
でかゝるさとゞをゝ球てまゝかゝるわをえ作る
かゝとゞかゝわいひてゞ稀乃こゞるゝとハいうき
つもわゝゞを六月乃つい半ちゆ月ゆをのいえる
まとゞゝかゝゞ乃ちゝるゝとゝひてえれハいゝゝハい
〳〵ゞゞゝうなんをいつまゞあるゝゞゝるゝとゝ
まハをゝをきねんをいつまゞあるゝゞゝるゝとゝ
やいとゞひんゝみうゝつゝゝしゝうハえ物せゞゝゝのまう
でゞゝゞゝ升いゞまゝてゝゝゞまゝわねゝとゝゞを

あゝゝゝゝこゝにとゝいねゝきゝわねゝゝをあゝじと
ゝゝよんゝうゝさゝをゝはゝ歯ゝゝわねゝゝとゝ稀んゝゝてゝかゝ
つゝゝゝかゝゝいゝとゝゝゝゝゝゝきハおゝほゝちゝゝまゝゝゝゝ
ゝゝにハひゝゝゝゝゝゝ

てよし山よりいでしをとのてらわをそち
をのしなんぬをのいえをてねさきにやて
山月いで半ちをのいをもをみぞやあちんとを
あなたをうゆわちを半しをそのたぎをの
とわちをうめをとしをるにうをしりろたを
をにたをとやてををうをとををの半て
うがを乃中にをしいまてわををしうにゆき
ものるををでわをををわをたをいでをこをに
をんをいををとをわてやをそ半をうをを乃中に
ををうをををわ
をしりをのををるをまわをも半ををねれハ

伊物又古今
ををををををををををけ
ねハめををせね名乃
つををを我んをる

をかひか半をにをををををかかをき
やををををにをを身ををををを称をやをいをやれを夫
わをわをせをを給ハねをををうををやあるをををとを日をん
これををあやををきをとを伏かをわをこををなををを
れををれををなをき人れををれををやををわをなをんをを
ねをこをきをを人をやををを乃ををるをれをあををわをを
ををををやををきをあをををはををををををきをををををを
物をねをいををなんをまをるををきをををを乃ををを
ねをいひを半ををををる物をををちをををわを半をし
げををををれ半をわをかをををををハををろををいを
ををわをををハあををををををををををををををををを

ごろ（ムス）ぶこなひにもぢんをう後と半とこかわ
ゆとき〳〵とわたしひてまれいひわと次なきと
をわまば半ぐいまわるとて
あさましやのやうにあれむとこれう林
うちへきるなをのうろよ
いとたをなんとあるをれればまいあいきぬ
半わてをのしねぬちをてうとなりまどおれ
にいまへもろかをにのうときくハ物せし物
をとまるやしことあるし二三四月もこのうろ
乃ほとぞかしあれくも半へこをわてをちゃん
よわるをしハなどとをひよハなるるもちを
ら間もこほれゆやをを人を人をかわ枝をひていう
くまづやうぐるかををいい半し半んを
まをよまをいひわてうをれやんもちね
草ぐをを志ものきなるにがを半ん草ともいとる
さけなげよてをたちをを半をるとをるに
を荷りうへを半をとしをとをいをれなをたく
いとうをしいゆなをををのして山道よとをつき
半わとしまれるを人ぬをををれをを半をいまとの
もわるをををてぬしたりを半ん海いわ半をわたる
さをしてぬいるを給をしおをわうをくまいわて
とぐうきをへよ半をとぬわをを半給をいひれれ

べあつ乃まに成くいでゝ世絵ひねこにけんもか
いてなんぢいわねかといひたまもいうくうにか
はしてけうあんしとぎかもしきあつとけるをい
うぐさしまうへむとしあるとけまべ月こ話のあつさ夜
さうじかよりなとしどけん物しつまべうちなき
てしまもかく成はなづきて疾きくしとていそぎ
かくつとめるとさんへうあつとこうよ四せうかくあつを
なんさ成よう舟せよ之ゝとかくひ平るとえて
うきてんれさなうおとろくしをしやうそ
ものしくをあるうみあがれ月任
をとせはわをわまてたもいでなかをとをる

物をとゝひたくゆのうとしそがしあたよのぼを
ねあつもんばきらしとたわあて見ゝるせへ
ざいとをうゝ平ゝ平ゝて見ゝおゝうてねところ
乃やうなるよこ平をいとしけるれをし話を
れどやゝ乃ほどなんはきくかつかをてそある
しゝまそやとこるよのとて沈吟でらそゝきは
とたしああてをねをるほどよ明へふてら
わざのうひうぬくるうてこけわよるわ夫
んん乃かとにかうまあくといひたゝ
ちるをとゝもんばわを平ゝをとゝもうちかろ
ゝてうやれがこ成ちわひうさをしとも

しるべかりしかさうき人きいたいしていく
くれぐるもあるくしまちてわるれひしへよる
ゑまいて来たるどもそのあり〳〵いわ
まハえかりねとゆどてよくうるあハよもなき
とりよいくものるれきんらもかへてと
にいうやよおぼしてうあやしきれあつき
ハあるとたんこうひしりとにらよえくへて
ちんのぼりくべてはまだかうのとしもかた
しまひなんたいくこうるなきくよる
んあはあくべてねんとくうせまへとしを
ちゆてゆきかつるくるひくよなわね

一丁ほどはいしくれてハほてをどもんかわ
ゆくへ人ニ行ごていくこうるしうもるあてかわね
かんなくはわるいとれうをくよもきかいさあよの
こいへこのあるくへ人をべてよむちいくくられし
うぐわのとをはいひなきねハるどをいをきき
ふしくるあにもなくゆもどをてうさよ
物をべきくいひくてはまハよしくかゆが
らひくんべあ海なきにもわしをいくはせえ
くふまりけよくわてくきゆばいくやを
ノわてきたる人をはれくてをんいくふ美を
てにてまきるくうちよまるを海うでこどて

なくいつまはこれを乃をしへよてあるにい
えしこうをしようをしらべともを乃いとでれば
人などこないでねとえへてこれ人ハうをてば
ちくあをんとしてきつまとしきんちハようんときま
れを助字ことよし
れこてしておいしまてとしねとてしとくをいと
ちくうをんどあるしまてとはさ傷かてやむ
をもあしをていひなくさんときはハうな
ねこちハいとちるうなうちちれはあるきうち
きいとしをくなわれるとへくいとたしてわな
しとをなどよはあをね京へ物しやうをきと
をしあれハ人いるしをつ大夫をへ乃いとなぐ

うけまきをかがしの乃をしてはをしきもきうを
とて物をれを祝れよけあてふを物をいとあ
をれどうくしうあわしはあきをよをやはけ
ねんとれりひまへしうハをくれうきうへ
うを給へとの乃をいの乃を学うへうをけるさてもいう
にれほへをるとあるをてうはとれをよ給へまは
いまをわ海雨間をいをくて海うわかへをんとしも加うう
あだきんらしをるなどこ海うにうきてしまは
じうしをれ洗せーえちとはえ給へけくまちハ
をしかじをとくしるくをやわきらへうをしい海い
をやくまをてぬをとうをてこけうれいをを乃
苦
着

万二
従吉野折取蘿生松柯
遺時頌田王奉入歌一首

[illegible]

大和物語
[illegible]

伊勢物語
[illegible]

立死日櫛

拾玉
後撰集 伊勢
[illegible]

[illegible]

尼ニナルト云ヒシ女ノ

[illegible]

曾丹集
うはそくのあさかふきさひし
松のそふ〻とりさの君ゝや
うつもれぬ〻ん

しほ〻ぎ次もうもちゐてすくせひこの八ぢと
とれりはまで学くいとい先しぎさ海さる
乃れりひ乃もえ人をわ人やとなるねわさ礼
まはとひとみるれぬ人わとともゆわよけく
みとそうへをきをるい礼ていとうやをてある
を学ぐわるもを海ひをさ人せんとハうさ人学わ
きる為もくせしかりをなうしをにそひてら
れるきとはひこ（左俗ノ）ハ人ぐしぐきる人乃
学乃をしあなけゆをる人をなければ
かしらをさいでをもへ乃とハ人ゝよかりひを
つとよ学る為れみじ人海をて為ん学れ花

（死ナニカナニトモフ）
うるはこ礼のそふりとをうてといふ
茉藏

えもくひやらねをこうる学ばよぢ河ハこばはまさ
尺かくてわくはいとんふやをうわをる学をみぢ
をしろなるをそいをくるかわをれゆくれ乃学
わひ乃ことを日のくしく乃称先うわ乃こでらのちい
さきうよも永をしくくとうも学くきり先学
みどをるこををきにでいくせんかるみいを
乃はれほゆるくみぢやうなるほらはるひるの
いとををわれハをしく乃かにでるう学るをこ乃
れさなきをいるを称しきいよきしき材れれ物
をふくをひいれさせじとなるへしみどかくハの給
みをいとわじ称ぢくもをへををとをへひくうを乃

よみくをこうつぎき分をそうにさそもへいま
ゑでわるをいうさんだそうよれんしてなるさゑ
にをちうわなんむやよにならんしまわはさて
わしばかぼつうなうねほどにかすいたくなきこの
よかりしるして元給へうていとわわねをうわを
ゑとゑひとつよりふを学くいとかくわしきこの
してをのをまいまぼいとしいうやせ給をろるな
んいとしいえしよかうちちとにてえきさんうにある人
こをいろうきかちわとにてもこをいとこんとをし
なんいとりとかしうえゆるうとしかまなうくをふ
とうくだいうくんをしさでさうわをよてにるうて

飯逆

ろうむうわにまよ女いろをねしばまるを学ぶうよのほうを
なひごろ物しいるる人をよそかんろをわるるて女乃
そうとろやろそいるくくとうさて仏こうげよやう
くいくをいとこうつをうをろうえやろそながるえを
いるるかどよあやわうわねおんらちいとおたんて
わうごをいとくるうをんをを山ことわうーをるせ
業
しよびあごしむやせよるゆふぐんなるるほと
師
よ祈んどごをよかちうしるるとわるいえしと
讃身
きいるくをんしうしう永多よあんことはゆも
よたををそわうんしよんをそきるりかそうる学
禅
やうに也ろをうまうふちのありろをにいんなを

いひてわるゆゑしてしんとしらひしさをのしろ
ものおもひとをいそせてう
ぶうてはかぼゆれはおくゑんとて物そのちらせいとで
なりきるとろうけりとろ少しとるほどに永もをとら
しひとりて又人をしるもに物しるとたいな
ぶてまづいうなるとらぶとさとわてかりいう
さくまつかるとりてはいえしく
きのれおぼえるとべるとなあまさどまるな
ぶとんとしたとたくんにしあしれ孫孫
じくんせどえるくきえんりるみよろづの
ちどいひおうしておあねまがいいしるえい
そくとあるをとうんぶてのちまいをし

ちをくんををくかしてのちやとをどいひてをい
とうろぼうをにいひてをしかはうなるさ海のそから
ぶうちをしうはわしまいのたとりてる
ぶめいぶしるほどにまれさなくとめもて
くぶんあるさなんとたりひあわいとよ
きちきさくくらちしてうくきをのとも
さ海しにやうはをあわまわて二ゝまはわる
ぶまをんをあさをひきちしをいてさをかわ
ごやをにやとしあるをを経うちしわれ
ぶなるをしたをにをびらやみのやをさ
海くよくをわちしてをのるわのいで

よれほゝハそもゝ乃ハ四そほ〳〵にてなんまゝぞきゝ
ゆゝまゝ〳〵きゝそも乃〳〵毋ゝかどいでなゝとよき
又そも乃〳〵るわゝそもさこそあゝ発ゝ乃ゝゞそもの発
よハとゝへゝたえ物せゝ乃ほゝわゝてゞめゝ生ゝ〳〵毋
ゝゝほゝゝゝたらにそいと生いゝ〳〵ゝきゝゞう
ゝ〳〵なゝゝなるハなゝでふゝとゝゞゝとなん乃ゝ
ゝゝかゝゝて乃ゝとゝいゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝるゝゝゝゝゝゝゝゝ

みとしてやてもいあむしをかこなひらんたいさや
こひなるにそいぶさとしとうよなるんのいしもるを
んさとしてもるにわなぶとうさんもるとしわをんは
てあつさをとうとあとうあるといをいはせ
ことをなくれいかもよこそわなんれよろだのとしう
ちこのきこのくおぐろなるくやくーをそか
しもるよとくうひうちなきけく車にもこのもい
じこくなるこんうまをつをにしらんでせんだれ
ようちもをみんぐうれわるう給なをワのくき
こえうをくやいぐこーせそまにつをのんるどいひう
ーそかくるこのくひびのなどわいかいていこ
をくさんぐーーそれハ家なるわんしたいく

みんねるくこひぎしわかくれそそくにひやさ海かー
さ海よいひなさこーしまど永う汚人にはまなくた
いつをきるわーやそをしそよーきそわんをいみひ海
き人ハ弟ころまるうんをのーー半海しにふこるあ
かってみんとあるにるさようなわーの日やう
まてさてきとしーこれこなるとわまばと
うろやをしー人ハなーーをるーしらよさもいと
ふくよこやわーー発うぎわなをさーー汚半つとふく
ふとしころをえをきてかるんわよしまーにいんと
をれやるわまでんどいんもくなんなバちるを全
やハわるをきるなどーとをくしをんをなーうる

とはれたるくきるをとも十五日いもゆみやし
てあるさむしの三ちよはしていをうと物せよやを
てをさ京へいぶしさてくどひなどあるいどにや
ちうちうまつほもとし申うて泰を神ゆ樂久色くとな
きいはふまるしふわうこを出るゆんをみとえちに
て雨をや梅花ん神をやなわまうんとそよ
よいとゆきうれしくて仏よりたまはよや
ゆんちんてほどゆなかつとうわいたはと
ちくんは雨をやいるくみうをるとそんは神乃な
里ゆるとをとよなんいでゆうでまうるとうをと
くにをしへしわんれよれほのこひのぬまわをよ

ゆわるいとあさをしくてゆくつこよりうばまるゆ
もさこれくハわしゆうくれりハてにげ先に
とれりひゆなんをしゆ年とはさうにそるきひわ
らをつをよひうをんとせんがを涙しき物よこひも
てよ里をわんしちうくはえ行をを仮ゆをでなる
海寺人乃ふをやをれるとえれをきさてをさのをや
わんををきる日乃ねるをうにいえしのをんれ
をひやるをでさゆくくをと仏寺わえ乃日わえる
ををををて乃をやをしをある人乃ををとをかくて
乃をををしををひ年を海へねをなるるゆをよなん
しうをてををきつ日うを仮ねをにわよをる

かなてをにをはやハせーゐぬゑ
いろはにほへとちりぬるを
又乃日かゝ[illegible]ゝとしはかきわけくもわ
ゝらさあのよなんきとゝろうらもるさて
ゆめみしひもせすん
まんなるさとハ人やもしよケわ

靖吟日記中巻中終